



## 地域一体となって、子どもの健全育成を

先日、小林真市長を会長とする「八戸市青少年問題協議会」が開催され、新年度の青少年健全育成の活動提言を協議し、取りまとめました。この提言は、八戸市の子どもたちを心身ともに健やかにたくましく成長させるために、家庭、学校、地域社会、企業、民間団体、関係機関に推進していただきたいことを提言したものです。

### 平成24年度 青少年健全育成の活動提言

#### 活動提言「子どもたちは地域からはぐくむ」という視点による連携強化

##### 〔提言内容〕

#### 1 「さわやか 八戸 あいさつ運動」の展開

八戸市内すべての家庭、学校、地域社会、企業、団体等のあらゆる場面で、「さわやかなあいさつ」が飛び交うよう啓発・参加を呼びかける。また、家庭や学校で最低限のしつけを身に付けさせるための「返事をきちんとする運動」「履き物を揃える運動」と、クリーンなまちづくりを目指して「ゴミ拾い運動」を展開する。

#### 2 青少年の健全育成の基盤となる「地域コミュニティ」の形成

- (1) 家庭や地域を巻き込んだ社会体験学習を展開する。
- (2) 青少年のボランティア活動の啓蒙を図るとともに、地域のボランティア活動への参加を促進する。
- (3) 社会人や地域人材の学校への活用を促進する。
- (4) 周りから子どもをサポートしていくために、日頃から地域住民や地域の諸団体、関係機関、学校などが連携し、情報を速やかに把握したり、巡回指導や声かけ活動をしったりする体制を整える。

#### 3 健全な家庭づくりへの支援

- (1) 「家庭の日」運動等の実践を通して、健全な家庭づくりへの促進を図る。
- (2) 父親の子育て参画等を促進し、家庭教育の学習機会の充実を図る。
- (3) 子育てに関する体験や悩みが共有できる「乳幼児をもつ親たちの交流の場」の設定を図る。
- (4) 関係機関の広報啓発活動の内容充実と配付対象の拡充を図る。

#### 4 体験活動の推進

- (1) 青少年団体における活動など学校外活動への参加を奨励する。
- (2) 自然体験活動を推進する。
- (3) 身近な体験活動の場の活用を図る。

#### 5 いじめ問題、薬物乱用問題等、今日的な課題への適切な対応

- (1) いじめ問題の解決に向けた取組を図る。
- (2) 万引き防止や喫煙防止、薬物乱用問題等への対応を図る。
- (3) 社会環境改善のための地域ぐるみの取組を図る。
- (4) いのちの教育を含めた「生き方に関する指導」の充実を図る。

今回の協議会では、「関係機関との連携」ということで、主に万引きについて協議しました。その中で、家庭、学校、地域社会、関係団体それぞれが当事者意識をもち、地域一体となって子どもの健全育成、そして万引き防止に向けて取り組むことを確認し合いました。

# 自分に自信を持ち、好きなこと、夢中になれることに取り組みましょう

東日本大震災から1年が経とうとしています。各家庭で子どもたちの心身の状況は違っていると思いますが、「記念日症候群」といわれる対応について、ご紹介いたします。

## ● 「記念日症候群」に気を付けよう

「記念日症候群」という言葉をご存知でしょうか。

これは強いストレスを受けた日、つまり災害が起きた日から1年後など、同じ季節や日にちになると、忘れかけていた記憶がよみがえり、再び気分がめいったり、不眠になったりと、症状がぶり返してしまうことです。

また、「あの地震から〇年～」といったような災害を振り返る報道がきっかけとなって、記念日症候群の症状が出てしまう人もいます。

子「最近、また夜眠れないの……。どうしても思い出しちゃうんだ」

母「またなの？ もうあれから1年も経っているのに。」

もう忘れたって言っていたでしょ。しっかりしてよ！」

災害をなかったことにするのが不可能なのと同じように、心に受けた傷をなかったことにするのは不可能です。残念ながら、災害にあったしまった記憶をなくすこともできません。1年経ったから、5年過ぎたからといって、そう簡単に忘れることなどできないのです。

ですから、決して

「またなの？」 「いつまでくよくよしているの？」

といった否定的なことを言わないようにしましょう。

「あれから1年経ったね」 「いろいろ思い出しちゃうのね」

など、子どもへの思いやりの心を忘れないことです。

災害を思い出すことで一番つらい思いをしているのは、子ども自身なのですから。

## ● どれくらい時間が経てば大丈夫になる？

災害で受ける心の傷は、人それぞれですし、もともとの個人の性格や気質によっても症状や反応は異なります。ですから「1年経ったら大丈夫」とか、「いつ治るのか？」といった具体的な数字を出すことはできません。

これまでも阪神・淡路大震災や新潟県中越沖地震などの大規模災害では、多くの人々が災害によるストレスの症状に苦しんできており、なかには10年以上が経過した現在でも、まだ時折フラッシュバックを起こすなどの後遺症に苦しんでいる方々もいます。

ただ、あまり神経質になりすぎる必要はありません。なるべく普段通りの生活を続けること。子どもには、回復する力が備わっています。

体が成長するように、子どもの心も成長します。そして心の成長とともに、心の傷もゆっくりと回復に向かいます。その回復力を信じて、周囲の大人がサポートしながら、ゆっくり待つとすることが大切です。

## ● 子どもが得意なものを一緒に見つけて

子どもの災害ストレスをいやす第一の方法は、繰り返しになりますが、過度の刺激を避けることと、スキンシップや会話などで、「安心していいよ」「大丈夫だよ」というメッセージを伝え続けることです。

子どもが夢中になれるものを見つけられるように導くのもよいでしょう。おけいこ事、趣味、スポーツ。もちろん勉強でも構いません。子どもが「得意」なものを見つけ、楽しんで取り組めるようにしてあげるのは、ちょっとしたことでも、ほめてあげると子どもはうれしくなって自信を持ちます。

「上手に絵がかけたね」「絵をかくのが好きなのね」

「かけっこが早いね」「かけっこが好きなのね」

「難しい漢字が書けるようになったね」

何かひとつ、子どもが心から「好きだ」と思えるもの、自分はこれが得意なんだと自覚できるもの—— そういったものが見つかる、そちらに熱中しているうちに、子どもはしだいに災害の記憶を乗り越えて、自分に自信をつけていきます。

心の傷はなかったことにはできませんが、自分に自信を持ち、また楽しいこと、夢中になれることを見つけて取り組むうちに、心の傷がいやされていくのです。